

5月4日(火・祝) 10:10~11:00 石川県立音楽堂邦楽ホール

H5041 能舞とクラシック「アルルの女」より

能舞：渡邊荀之助、渡邊茂人、川瀬隆士

モダンバレエ：中村香耶

指揮：鈴木織衛

演奏：ガルガン・アンサンブル

[福田廉之介、ジドレ・オブシュカイテ、大村俊介、谷口絵美、有吉幸乃、坂口昌優、大村一恵、竹田樹莉果、佐川絵美(ヴァイオリン)、般若佳子、高田愛子(ヴィオラ)、ルドヴィート・カンタ、福野桂子(チェロ)、岡本潤(コントラバス)、川崎惇(フルート)、松永彩子(クラリネット)、水本元(オーボエ)、柳浦慎史(ファゴット)、笠間美美(ホルン)、上田智子(ハープ)]

いまや音楽祭の名物となった“能舞とクラシックの共演”シリーズは、「ラ・フォル・ジュルネ金沢」時代より毎年上演を重ねて好評を頂いて参りました。2018年からは中村豊氏の演出により単なる洋と邦のコラボレーションという域を超えて、より壮大な世界を表現する舞台へと進化を遂げました。

今年、音楽祭が選んだ曲はビゼーの「アルルの女」。有名なこの曲を指揮・鈴木織衛氏と21人の管弦楽団が演奏します。その音楽に、能舞・渡邊荀之助師をはじめとした名手たちの舞と踊りが乗って、果たしてどのような「アルルの女」が創出されるのか。どうぞお楽しみにご覧下さい。

これから始まる舞台をよりお楽しみ頂くために、ご観覧のお供として本紙をご用意しました。開演前にご一読頂けますと幸いです。

《演出ノート》

「アルルの女」の物語を極めて簡単に纏めると、アルル地方で見かけた女に恋をした男(フェデリコ)が、最後には嫉妬に狂い自ら命を絶つという話です。

風薫る5月の朝、「南欧の風」と題したこの音楽祭の演目として相応しいストーリーか否かはさておき、誰しも耳にしたことのある名曲が並びます。

ビゼーの「アルルの女」は3幕27曲からなる劇付随曲ですが、今回はその中でも特に有名なビゼー自身が選んだ第一組曲と彼の友人ギローが編んだ第二組曲で構成しました。

本公演はその二つの組曲を用いて、本来のストーリーとそれに付随した音楽との関係性を切り離し、能舞とモダンバレエによって劇中のシーンを新たな角度から浮かび上がらせるという試みです。配役と曲ごとの情景は概ね以下のとおりですが、あまり囚われることなく自由にご覧下さい。昨年から続くマスク生活の不確かな現実の中で、生の舞台の確かなフィクションの魅力を再発見して頂ければ幸いです。

令和3年5月吉日
構成・演出/中村 豊